様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：２３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２５４０

研究課題名（和文）恵那の生活綴方教育と新教育の現代的展開に関する研究

研究課題名（英文）Study on Education for Life-Writing in Ena region and New Education

研究代表者
佐藤　隆（SATO, TAKASHI）

都留文科大学・教養学部・特任教授

研究者番号：７０２２５９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：第１の成果は、丹羽徳子の著作論文をまとめた「丹羽徳子教育実践記録集」の作成である。この記録集の作成・読み取りを通じて、子どもの表現を大切にするという点で、臨床教育学的視点をすでに1970年代に丹羽自身が獲得し、発信し続けていたことを明らかにしたことである。これは1900年代初頭からの国際的新教育運動のなかで確かめられてきた原理の現代的な意義を確認する作業でもあった。
　第2に、フィンランドの学校教育現場での調査を行ったが、新教育-生活綴方教育に連なる発想を多くの教師たちの発言から確認できた。その意味では、子ども理解と学習指導をつなぐ教師の専門性の追究がフィンランドでも進んでいることを確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
丹羽徳子を含む当時の「恵那の教育」が実践的に臨床教育学の枠組みをすでに提示していたことを明らかにすることができた。同時に、この研究を通じて、子どもを理解することと学習のあり方の構造的連関を具体的に明らかにする必要性についてあらためて確認することができた。また、「丹羽徳子教育実践記録集」を作成し、冊子とDVD化したが、これを必要とする研究者等への配布を予定している。これによって当時の「恵那の教育」をより詳しく明らかにするとともに、先述の課題に対してアプローチする素材を提供できたと考える。

研究成果の概要（英文）：First, we would like to mention, we finalized to publish “The Anthology of Noriko Niwa Educational Works”. This Anthology is complete collection of all her works. These her works lead us to further studies in clinical research on human development and education. Her educational practice aimed to understand and to care the children through their expressions such as life writings. Also, she tried to build the learning community. Her works promote us to further research on individual and cooperative learning. Secondly, as part of examining the world's educational practices, we conducted a survey at some schools in Finland. We found that student well-being and interest in learning are proper concern of teachers in Finland. At this point of view, we should research modern education in Japan and the other countries.

研究分野：教育実践学

キーワード：生活綴方教育　臨床教育学　新教育新教育　主体的・対話的な学び

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の問題意識は、以下に示した 1）～4）であった。これらに沿って研究を進めたが、コロナウイルス感染症の影響の影響もあり、文献調査・資料探索を中心とせざるを得なくなり、海外調査については一部、対象を変更することとなった。

（1）新教育と生活綴方教育の思想の現代的意義は何か

およそ一世紀前、アメリカやヨーロッパそして日本で新教育運動が起こった。大正自由教育とも呼ばれた日本の新教育は明治期に確立された画一的な学校教育を批判し、教師による教授中心ではなく、子どもが生活経験と結びつけ主体的に学ぶための教育実践をつくりだした。生活綴方教育は大正新教育を源流とし 1930 年代に全国に広がったが、戦時下に弾圧された。そして戦後に『山びこ学校』に代表されるように民主主義教育への機運の中で復興した。

しかし 1950 年代後半には「教科の系統性」や「科学と教育の結合」が重視され、生活綴方教育は経験主義と批判されて衰退した一方、教授中心の詰め込み教育が学校を覆っていった。

そして今「主体的・対話的で深い学び」が教育改革の課題として登場している。教師が主導する教授と、子どもが主体的に学ぶことは容易には折り合わず、揺れや論争をくり返してきた。こうした状況をふまえて橋本美保は「新教育はどうして成就しないのか」と問い、新教育の思想を根本的に捉え直そうとしている（橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想』2015）。そして新教育の一つである生活綴方教育の思想も問い直される必要がある。

（2）高度経済成長後の生活綴方教育の課題は何であったか

1970 年代の「恵那の教育」の最大の特徴は生活綴方教育の復興であるが、『山びこ学校』に象徴される戦後直後の貧しさの中での生活綴方教育とは異なる。当時の「恵那の教育」は管理職を含め教員の 9 割近くを組織した東濃民主教育研究会（以下、東濃民教研）によって担われたが、会の事務局長・石田和男は次のように当時の生活綴方教育をとらえていた。

石田は、高度成長がもたらした地域の変貌と生活の抽象化のなかで、子どもの生活実感を伴った表現を引き出すことが難しくなっているとしながらも、だからこそ事実をありのままに見つめ、ありのままに綴ることが、子どもの生きる意欲と学ぶ意欲を引き出すことになると述べた（「やっと探し当てた生活綴方」『西の綴方』1971 年『恵那の生活綴方教育 別巻 3』1982 年、草土文化、所収）。

さらに「生活綴方で自らの生活を直視することによって得られる目が、科学の基本をとらえる目や態度をつくる」として生活認識と科学的認識の形成の相即性をとらえた（「ありのままの教育と生活綴方」1973 年講演、前掲書所収）。自分の外部にある知を客観的・静態的なものととらえそれを受動的に取り込むのではなく、学習者が対象に能動的に働きかけ、知を自分で編み直していくことで科学的な認識が形成されるという主張は、「主体的・対話的で深い学び」の実践課題として再検討される必要がある。

（3）丹羽徳子の生活綴方教育と低学力攻撃が意味すること

石田和男とともに東濃民教研で活動し「私の教育課程づくり」と「わかる学習」を追究しながら生活綴方教育を実践したのが、小学校教師・丹羽徳子であった。丹羽は 1975～76 年度に 5, 6 年生を持ち上がりで担任し、その教育実践記録を『明日に向かって』（上・下、1982 年、草土文化）として出版している。

この２年間の教育実践のさなかに丹羽は地元政治家や保護者の一部から「生活綴方教育では学力が下がる」という攻撃を受けた。そのことは実践記録にも描かれ、また当時の記録映画にも残っている。さらに国民教育研究所や教育科学研究会によって調査もおこなわれた。

丹羽は 1994 年に退職するまで生活綴方の実践を続けたが、恵那の地域ぐるみでの生活綴方教育は 1980 年代半ばから勢いを失った。低学力攻撃が子ども・保護者そして丹羽や恵那の教師たちにどのような影響をもたらしたかも含めて、丹羽の教師としての自己形成と教育実践の深化を検討する。それは新教育がこれまでの歴史の中で絶えず受けてきた批判の性質をどのように分析するかという学術的課題につながるものである。

（4）新教育の現代的展開と生活綴方教育の比較研究

2019 年 4 月、長野県にイエナプラン・スクールの小学校が開校し、名古屋市や福山市など日本でも公立小学校にイエナプランを導入する動きが広がっている。オランダ・イエナプランは、1920 年代にドイツのペーターセンがイエナ大学の実験校で始めたイエナプランを「フレネ教育の信奉者」が受け継ぎ発展させたという（リヒテルズ直子『今こそ日本の学校に！イエナプラン実践ガイドブック』教育開発研究所 2019）。今もフランスの多くの公立小学校でフレネ教育の実践の自由が保障されているが、10 年前からは公立コレージュ(中学)にフレネクラスを設け、教授中心の伝統的教育を変える実験教育も始まっている。こうした新教育の現代的展開の具体的な実践と生活綴方教育との比較研究をおこなうことは、諸外国の新教育と日本の教育がどのように接続しうるかを明らかにするためにも必要である。とりわけフレネ教育の「自由テクスト」「個別化学習」と、恵那の生活綴方と「わかる学習」の異質性と共通性を明らかにしたい。

２．研究の目的

（1）岐阜県恵那では高度経済成長期後の 1970 年代に生活綴方教育の戦後第二の復興があった。研究代表者らはその理論的リーダーであった石田和男の著作集を刊行し収録論文で研究成果を発表した。それに続いて石田の理論を実践的に展開した小学校教師・丹羽徳子の生活綴方実践から現代の教育に継承しうることを明らかにする。

（2）近年、学習の個別化と協働化、カリキュラム・マネジメント等が学校教育に求められているが、丹羽徳子は子どもが学習したことの自分にとっての意味を考えさせ、学級等で共有した。そうした個々の学びを交流し協働化していくことをつくり出したのが「私の教育課程づくり」であった。その教育実践の現代的意義を明らかにする。

（3）学習の個別化など教育改革の中で注目されているオランダのイエナプランや、フランスでのフレネ教育など諸外国の新教育の現代的展開と、生活綴方教育の異質性と普遍性を明らかにする。

３．研究の方法

（1）上記の研究目的を達成すべく、「恵那の教育」の実態を知るための諸資料の探索を行った。

（2）とりわけ、「恵那の教育」の代表的な実践家であった丹羽徳子の教育実践に注目することを通じて、現代における生活綴方教育の意義を確認し、生活綴方教育が「子ども理解」という臨床教育学のルーツのひとつであることを確認した。

（3）子どもの学びへの意欲を喚起することを重視して 2014 年に改定された学習指導要領（ナショナル・コア・カリキュラム）が本格実施されて 10 年たったフィンランドの学校教育現場での調査を行った。子ども理解と学習指導をつなぐ教師の専門性の追究がフィンランドでも進んでいることを確認した。

４．研究成果

（1）「丹羽徳子教育実践記録集」を作成し、広くこれを共有するために、冊子と DVD にこれを収録した。ここには丹羽徳子が雑誌等に発表したすべての論文・実践記録が収められている。

（2）「丹羽徳子教育実践記録集」の編集過程において、本研究テーマと直接・間接に関わる研究論文を研究代表者・研究分担者が執筆した。

研究代表者・佐藤隆は、「GIGA スクール構想と『主体的・対話的で深い学び』のゆくえ」（2021 年）「『個別最適な学び』の何が問題か」（2021 年）で個別的な学びと協働的な学びをどのように検討するべきかの視点を示すとともに、「フィンランドの教育からいま何を学び直すのか」（2023 年）では、フィンランドのナショナルコアカリキュラムに見られる子ども理解と学習指導の関係性についての世界的な動向を検討した。

片岡洋子は、「つながり、学びあうためのオンライン」（2020 年）「現代における教育実践記録」（2020 年）「『自己の育ち』と子ども理解」（2021 年）等で、丹羽徳子や「恵那の教育」がめざしていたものが現代においてどのように深化しているのか、またその課題は何かについて検討を進めた。

渡邊由之は、恵那の「『子どもをつかむ』実践・思想に学び、今なお刺激を受け続ける」（2021 年）口頭発表において、丹羽徳子の教育観と教育実践について検討した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

1．著者名 佐藤　隆	4．巻 326号
2．論文標題 フィンランドの教育からいま何を学び直すのか	5．発行年 2023年
3．雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6．最初と最後の頁 52－57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　隆	4．巻 928号
2．論文標題 「令和の日本型学校」と教師のゆくえ	5．発行年 2023年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片岡洋子	4．巻 900号
2．論文標題 ジェンダー・性の多様性と生活綴方	5．発行年 2022年
3．雑誌名 作文と教育	6．最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片岡洋子	4．巻 925号
2．論文標題 人権の要としての「同意」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片岡洋子	４．巻 927号
２．論文標題 多様な大人と出会う学校を	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育	６．最初と最後の頁 88-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤　隆	４．巻 2021年6月号
２．論文標題 「評価」に管理される教育の時代	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『教育』	６．最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤　隆	４．巻 2021年版
２．論文標題 GIGAスクールで学校はどう変わるのか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『子ども白書』	６．最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片岡洋子	４．巻 2021年7月号
２．論文標題 「自己の育ち」と子ども理解	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『教育』	６．最初と最後の頁 69－75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片岡洋子	４．巻 2021年8月号
２．論文標題 寮美千子さんの言葉の翼	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『教育』	６．最初と最後の頁 25－26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤　隆	４．巻 2020年11月号
２．論文標題 コロナが照射する日本の教育課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育	６．最初と最後の頁 6－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤　隆	４．巻 No.94
２．論文標題 GIGAスクール構想と「主体的・対話的で深い学び」のゆくえ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 さいたまの教育と文化	６．最初と最後の頁 25－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤　隆	４．巻 2021年2月号
２．論文標題 「令和の日本型学校教育」とはなにか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育	６．最初と最後の頁 96－99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　隆	4．巻 2021年4月号
2．論文標題 「個別最適な学び」の何が問題か	5．発行年 2021年
3．雑誌名 世界	6．最初と最後の頁 135-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片岡洋子	4．巻 2020年5月号
2．論文標題 校内フリースクール　可能性と課題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片岡洋子	4．巻 2020年11月
2．論文標題 つながり、学びあうためのオンライン	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片岡洋子	4．巻 2021年1月号
2．論文標題 現代における教育実践記録	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 69-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 渡邉由之
2．発表標題 含于日本生活作文教育中的学童理解理念　（日本の生活綴方教育における子ども理解の思想）"
3．学会等名 南京暁荘学院（オンライン発表）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 渡邉由之
2．発表標題 恵那の「子どもをつかむ」実践・思想に学び、今なお刺激を受け続ける
3．学会等名 地域民主教育全国研究交流会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡邉　由之 (Watanabe Yoshiyuki) (40611348)	東大阪大学・公私立大学の部局等・教授 (34440)	
研究分担者	片岡　洋子 (Kataoka Yoko) (80226018)	放送大学・千葉学習センター・特任教授 (32508)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関